

2024年6月23日

年間第12主日

菊地功大司教 メッセージ

人生を生きていく中で、わたしたちはしばしば困難に直面し、自分でなんとか解決できることもあれば、誰かの助けがなければ立ち上がることもできないほどの危機に直面することもあります。

なかでも、いのちの危機をもたらす暴力的な状況に置かれたとき、例えば戦争が続いているウクライナや、多くの人がいのちの危機に直面しているガザの現実などの中で、どれほどのいのちが、今この瞬間に、誰かの助けが必要だと感じていることでしょうか。助けを必要としている人がこれだけ世界には存在しているのに、世界のリーダーたちはその危機的状況を解決するよりも、深刻化させるために知識と資金を費やしているようにしか見えません。

「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」

マルコ福音に記されているこの弟子たちの叫びは、今の時代を生きているわたしたちの叫びでもあります。いのちの危機に直面し、解決の糸口が見えないまま取り残されているわたしたちにとって、現実はまさしく、荒波に翻弄される船の中に取り残された弟子たちの姿であります。

世の終わりまでともにいてくださると約束された主は、恐れにとりつかれ、孤独のうちにいのちの危機に直面している一人ひとりに対して、「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と語りかけます。それは決して、信仰が弱いからだめなのだなどと批判する言葉ではありません。それはまさしく荒れ狂う湖に翻弄される船の中には、弟子たちだけがいいたのではなく、主御自身もともにおられた事実を、改めて弟子たちに思い起こさせる言葉であります。「わたしはここに共にいる」と、慰めを与えるいつくしみの言葉であります。

そして今日、いのちの危機に直面し、恐れにとられるわたしたちに対して、主は改めて、「わたしはここに共にいる」と、慰めの言葉を与えてくださいます。主は共におられます。

2025年の聖年を告示する大勅書「希望はわたしたちを欺くことはありません（ローマ5.5）」を発表された教皇様は、わたしたちがこの世界にあって「希望の巡礼者」として生きることを呼びかけます。特に教皇様は、この聖年を主が与える「時のしるし」を読み取る機会としながら、わたしたちが悪と暴力に打ち負かされてしまったと思い込んで恐れにとられる誘惑に勝つために、今日の世界に存在する善に目を向けることを忘れないように勧められます。この世界は、絶望だけに満ちあふれているのではなく、希望を生み出す善は存在していることを、教皇様は強調されます。

その上で、「時のしるし」を良く読み取り、それを「希望のしるし」に変容するようにとわたしたちを招いています。

わたしたちの一番の希望の源は、いのちの与え主である主御自身が、いつまでもわたしたちと共にいてくださるという確信です。わたしたちはいのちの主から見捨てられることがないという確信です。主は絶望や苦しみの中にあるわたしたちと、いつも共におられます。